

#20

保育士

人生の大切な時期にかかわる仕事



今回のゲストは、保育士の^{いちのせ}一瀬 ^{かなで}奏さんです。一瀬さんは高校生のとき、ボランティア活動などで小さな子どもに接したことをきっかけに、この仕事を目指すようになりました。でも実際に保育士として働き始めてみたら、仕事のイメージが大きく変わったと言います。子どもと楽しく遊ぶことももちろん大切だけど、ほかにもいろいろなことを考えながら子どもに接しているという一瀬さんに、保育士の役割や、仕事のやりがいについて、詳しく伺います。



MC・リポーター
廣村季生

保育士の仕事とは

保育士の多くは、保育所で働き、乳児から小学校入学前の子どもを保護者からあずかって一緒に過ごします。食事や着替え、排せつなどの世話をしたり、遊びやさまざまな活動をしたりするだけでなく、子どもの成長の目標を立てたり、記録したり、保護者に子どもの様子を伝えたりと、仕事の内容は多岐にわたります。子どもの健康や発達、社会福祉などの知識を持ち、子どもたちの成長を専門家としてサポートします。

保育士になるには

保育士は、児童福祉法に基づいた国家資格です。資格を得るには、保育士の養成課程のある大学や短大、専修学校などで必要な単位を取得して卒業をする方法と、保育士資格試験を受けて合格する方法の2つがあります。

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。



保育士・一瀬 奏さんに聞きました！

廣村：一瀬さんは保育士になってどれくらいになるんですか？

一瀬：いま3年目になります。

廣村：一瀬さんが保育士を目指したきっかけって何だったんですか？

一瀬：きっかけが2つあって。まず1つは、高校2年生のとき学校の課題で、夏休みに子育て広場っていう所にボランティアに行く機会があったんですね。数日間入らせていただいて、最終日に4歳の男の子に後ろから小指をぎゅって握られて、「奏先生バイバイ」って言われたのがすごくうれしくて。「ああいいな」っていうふうに思ったのが1つ目のきっかけです。

もう1つきっかけがあったんですけど、高校3年生のときに学校で保育体験っていうものに行く機会があったんです。私は0歳児クラスに入らせていただいて。その中で毎日ずっと泣いてる女の子がいて、先生たちもちょっとあきらめているところがあるのか、「その子にはかかわらなくていいよ」と言われてしまって。でも何日かあと、一人の先生に、「お昼寝が終わったら今日遊んであげて」って言われて、私と一緒に遊んでいたら、次の日泣かずに保育園に来て、他の誰でもなく私のところにきてくれたっていうことがあったんです。赤ちゃんにとって人とのかかわりってすごく大事なんだなって思ったのと、こんなに愛おしい仕事なんだなと思って、幼稚園の先生だったり保育士っていうものを目指すようになりました。

廣村：ほっこりするエピソードですね。実際に保育士になってみて、高校生のころとイメージって変わりましたか？

一瀬：はい、変わりました。当時は遊んでいるだけっていうイメージがやっぱりあったんですけども、子ども一人ひとりの育ちを保障するために裏でいろんな仕事があるってということと、それから、自分が思っていた以上に、すごくやりがいと幸せにあふれた仕事だなって思います。

子どもたちの大切な時期にかかわりたかった

廣村：まず、一瀬さんが保育士になるまでのお話から教えてください。

一瀬：私は国家試験を受けて資格を取得しました。保育士になるためには、短大や専門学校、あとは大学を卒業して資格を得る方法と、もう1つ、国家試験を受けるっていう方法があるのですが、私の通っていた大学では幼稚園の免許しか取れなかったんで、保育士の資格を取るために試験を受けました。

廣村：幼稚園と保育園では先生の資格が違うんですか？

一瀬：そうなんです。幼稚園と保育園の先生になるためにはそれぞれの資格が必要なんです。難しいことを言うと、幼稚園は文部科学省、保育園は厚生労働省の管轄になるので、幼稚園の資格を持っていても保育士として働くことはできないし、逆も同じで保育士の資格を

持っていても幼稚園の先生として働くことってできないんです。

廣村：保育士の資格を取るためにはご自身で勉強されてたんですか？

一瀬：はい、自分で勉強しました。

廣村：へえ、すごい。そうだったんですね。一瀬さんが幼稚園ではなく保育園を選んだのはなぜなんですか？

一瀬：実は幼稚園と保育園って少し違うところがあります。幼稚園は基本的に3歳から6歳ぐらいまでの子どもたち、それから保育園は基本的に0歳から6歳ぐらいの子どもたちまでを見るんですね。で、はじめは自分が過ごした幼稚園の先生になりたいと思っていたんですけども、ボランティアやアルバイトで2歳以下の子どもたちと触れ合う中で、やっぱりすごくかわいい（ことに気づいた）んですね。で、幼稚園だと0から2歳までの子どもたちはなかなか見ることができないので、保育士になろうと思いました。それから、大学で乳幼児期が人生の基盤になるすごく大事な時期だと学んで、3歳以降のアプローチよりもっと小さいころから基盤を作るほうがいいのか、子どもたちの大切な時期にぜひかわりたいと思って、保育士を目指すようになりました。

廣村：一瀬さんは保育園でアルバイトもされていたんですか？

一瀬：はい。アルバイトもボランティアもいろいろやっていました。

廣村：そうだったんですね。一瀬さんは実際に保育士になってみたら仕事のイメージが変わったとおっしゃってましたが、実際には保育士さんのお仕事ってどんな感じなんですか？

一瀬：やっぱり子どもと遊ぶっていうのがもちろん一番大切な仕事なんですけど、ただ遊ばせているわけでは、ないんですね。「子どもが遊びの中でどんなことを楽しんでいるのかな、魅力的に思っているのかな」ということを自分で見てみたり。「今はちょっと集中しているから話しかけずに見守ろう」というときもあるし、ときには保育者の言葉かけで遊びが広がっていくっていうこともあります。たとえば、ままごとをしているときに、食材を“アム”って食べるまねをしていた子がいたとしたら、廣村さんだったらその子に対してどんなアプローチをしますか？

廣村：「おいしい？」って聞きます。

一瀬：すごくすてきだと思います。やっぱり私たちも、「おいしいね」とか「甘いね」とか「熱いね」とか、味覚や温度を伝えるような言葉かけをしたり、スプーンやお皿を用意して、食材をスプーンですくうっていう動きにつながるような配慮をしてみたり。

あと、私は保育園でカナちゃんって呼ばれてるんですけど、「カナちゃんにもください」と言うことで、保育者とのやり取りが生まれるような働きかけをしたりしています。こういうことをすることによって、「自分のもの」というところ（考え方）から「相手にあげると喜んでもらえる」という発見（に広がっ）たり、無理やりお友達からおもちゃを取るんじゃなくて、「ください」という表現があるんだってことを知るきっかけにもなる。そのことを通して、子どもに今必要な経験は何かを考えながら、私たちは遊んでいます。

廣村：そんなにたくさんのことを考えてくれてたんですね。

子どもと遊ぶ以外にもいろんな仕事がある！

廣村：ほかにはどんなお仕事をされているんですか？

一瀬：クラス単位で日案、週案、月案っていう計画を立てます。1年の終わりにどこまで成長してほしいかを考えて、年間の計画から、その月案、週案、日案っていうものに落とし込んでいくんです。たとえば3歳児クラスでお箸を使えるようになることを見越して、今1・2歳のクラスでは、トンゴで物をつまむおもちゃだったり、洗濯バサミなどの指先を使うおもちゃを取り入れているんです。で、洗濯バサミって指先にすごく力が入らないとつまめないで、そのもっと前の段階では、ヒモ通して行って、穴の開いているおもちゃにヒモを通すものだったり。あと、パズルとか粘土とか、手だけじゃなくて指を使うおもちゃを用意したりしています。それから、手先の感覚を高めるために、フィンガーペインティングって行って手で絵の具を塗る活動もおこなったりしています。

廣村：ヒモを通す遊びから（計画的に）考えてくれてたなんて、びっくりです！

一瀬：そうなんです。それから、連絡帳もすごく大切な記録になるんですね。

「その子が一日どう過ごしたのか」とか「何を楽しんでたか」もしくは「この活動にはちょっとあまり積極的ではなかった」とか、個人の記録になるんです。で、連絡帳っていうのは保護者の方にお渡しするものなので、保護者の方にも、家では見られないその子の姿、特に兄弟姉妹がいない子って、園でお友達と遊ぶことって、すごく人間関係を構築するのに大事なことなので、そういう姿をお伝えしていくことで「この先生になら安心してあずけられる」って思っただけ。そのための大切なやり取りに、連絡帳がなっています。あとは、連絡帳以外にも保護者の方や職員が見られる、その日印象に残ったエピソードをアプリから見られるものだったり、ドキュメンテーションって言って、子どもの写真とか言葉をそえたりして、子どもたちの育ちの記録っていうものを書いたりしているんですけれども、そういうものを通してこの日の保育のねらいだったり、実際にやってみてどんなことを楽しんでたのかを伝えるようにしています。

でも、子どもたちと遊ぶことがやっぱり一番大切なことで、子どもの姿が見えないと、さっき言った計画（を作ったり）、保護者に伝えることもできないので、一番、子どもたちと遊ぶことは大切にしたいと私たちも思っているところです。私が保育園に入って1年目のときに、「1年目から3年目ぐらいまでは『子どもたちと遊ぶのが本当に楽しい』『子どもってかわいい』って思う心を大切にしてほしい」って上の先生たちに言われたのを今でもすごく覚えています。

お気に入りの音：子どもがつぶやく声

廣村：一瀬さんがお仕事をしていく中で好きな音ってありますか？

一瀬：やっぱり子どもの声が一番好きだなんて思います。子どもの声に保育のヒントが隠れていることってたくさんあるんですよ。たとえば、すごくちっちゃな声で、直前までお友達が歌っていた歌をまねして歌っているってということがあったりして。それに気づいたら保育者がマットでステージを用意してあげたりすると、直前まで歌っていた子と、今歌っている子、2人ともステージにのぼって歌い始めて、「お友達と一緒に歌うって楽しいな」っていう感じでお互いに顔を見合わせて笑ったりする姿があったりするんです。ちょっと難しい話になるんですけど、小さい子って自分の頭の中で考えていることを口に出して整理することが多いんです。

たとえば「〇〇ちゃんこれからピアノ作るんだよね」って言っている。特にそれは誰かに向かって話しているわけではないんですけど、この独り言が「自分はこれがやりたい」っていう思いを自然にまわりに伝えているんです。要は子どもの声によって助けられていることがたくさんあるなっていうふうに思います。

ほかの先生とのコミュニケーションが大切なわけは……

廣村：一瀬さんが仕事をしていくうえで大事にしていることって何ですか？

一瀬：やっぱりほかの先生とコミュニケーションを取ることかなと思います。仕事をする上で一番大切なことだなんて思っていて。風通しの良い現場では子どものことも語り合えるし、より良い保育につなげるための話し合いもたくさんできるかなと思うので、コミュニケーション取るとは大事だなんて思っています。

廣村：ほかの先生とは、たとえばどんなコミュニケーション取っているんですか？

一瀬：一番大切だなんて思うのは、まずあいさつ。朝「おはようございます」のあいさつだったり、「今日はお先に失礼します」みたいなあいさつをきちんとすることが大切かなと思っていて。そのあいさつをきっかけとしてほかの先生との会話も広がるというところで……。たとえば子どもの話、「今日〇〇ちゃんはこのことをしていたのがおもしろかったんだよね」って自分の感想でもいいし、「今日はこういうところがちょっと困ったんだけど先生だったらどうする？」みたいな相談事もしたりします。

廣村：そうなんですね。

一瀬：それから、大人同士がコミュニケーションを取っているのって、やっぱり子どもたちもよく見ているんですよ。大人同士がすごい緊迫した雰囲気だと子どもたちもカチコチになってしまうし、大人同士がやり取りをよくしているところだと、子どもたちも、「この先生は安心できるから、その先生と仲がいい先生も安心できる存在なんだな」と思うことができるので、そういった面でもコミュニケーションは大事だと思います。

男性も、女性も、外国人も……いろんな保育士がいてほしい

廣村：ほかの人とコミュニケーションを取ることが難しいなっている高校生にアドバイスををお願いします。

一瀬：はい。まずは自分の近い人と話す機会を作るのがいいんじゃないかなって思います。本当に他愛もない話で全然いいとされていて。「今日は涼しいね、秋のにおいがするね」とか、そんなことでも話が広がるかもしれないと思うので。仲の良い人との中で自分の意見をきちんと話せるようになれば、「別の人にも」っていうふうに次につながっていくかなと思います。アウトプットはやっぱり大事だなと思うのと、あと、笑顔も大事だなって思います。緊張していても目が合ったときににっこりできるかって大事な気がします。

廣村：将来保育士になりたいと思っている高校生はどんな準備をしたらいいですか？

一瀬：うーん、やっぱり、子どもと触れ合う機会をたくさん作ってほしいなっていうふうに思います。今、保育園でも結構、アルバイトやボランティアを募集していることが多いので。ボランティアでもアルバイトでも、ちょっぴり見学とかでも良いので、ぜひ子どもたちと遊んでほしいなと思います。保育士になるといろんなことを考えて子どもとかかわっているの、保育士になる前の学生さんだけが、何も考えずにただただ「子どもと遊ぶのって楽しい」と考えられる時期だと思うので、学生の特権をいかして、たっぷり子どもと遊んでほしいなと思います。

廣村：普段生活しているだけじゃ子どもと触れ合うことってなかなかないので、アルバイトとかボランティアができるっていうのはありがたいなと思いました。

一瀬：ちなみにうちの保育園でも今、男性の保育士さんが3人いらして、女の子だけでなく男の子でも保育士になりたいって思いがあったら、ぜひぜひ園に遊びにきてもらいたいなって思います。子どもたちも、いろんな人がいる中で育っていくっていうのはすごく大事なことだなって思うんです。

それからうちの保育園だと外国人の保育者もいて、外国の先生も英語を教えるためにいるっていうわけではなくて、「いろんな文化があって自分とは違う人もいるんだな」っていうふうに子どもたちが気付けるための先生というか。いろんな保育者と触れ合うっていうことがすごく大事だと思うので、ぜひ男の子でも外国の方でももちろん女の子でも、保育園とか幼稚園とか、そういうところでアルバイトやボランティアしてみてもらいたいなと思います。

廣村：自分が何をしたらいいのかわからないっていう人には何て声をかけますか？

一瀬：私の大学は2年生から専門コースに入る仕組みだったので、1年生のときどんな授業でもとれたんです。そこで歴史とか自分の好きな分野を勉強できたのがすごく良かったなって思っていて。将来どんなことをしたらいいのかわからないっていう方も、まずは「自分の好きなことから探してみる」といいのかなって思います。好きなことを続けているうちに、「ああこれは自分に向いてないな」とか「こんなことが向いてるのかもな」っていうのが見えてくると思います。それから、個人的には転職することってマイナスだとは思ってなくて。今の時代、続けることだけが正義ではないし、自分がより心地良く仕事

ができるように追い求めるのもすてきなことだと思うので、「一度就職して失敗したら……」って怖くなる気持ちもあるかもしれないですけど、就職することがゴールって捉えずに、自分に合うものを探してみしてほしいなと思います。

廣村：とりあえず自分が好きなことから興味を持ってみるっていうのはすごく大事なことですよね。

一瀬さんの夢は……？

廣村：保育士ってすごくいろいろ考えて仕事をしているんですね。

一瀬：じつはそうなんです。子どもと遊んでいるだけって私自身も思っていたんですけど、常に「子どもがより良く生きるためにはどうしたらいいのかな」とか「将来社会に出たら自分の気持ちを表現するのをためらわないでほしいな」とか「たくさん愛されてほしいな」とか、子どもたちの現在から未来のことまで含めていろいろなことを考えながら日々保育をしています。子どもたちの人生の基盤となるこの時期にかかわれるってすごくすてきなことだと思うんです。なので、そんな仕事のことを少しでも興味を持っていただけたらうれしいなと思います。

廣村：保育園に通っている間だけじゃなくて、それから先のことも考えてくれてるのが、すごくうれしく感じました。

一瀬：ありがとうございます。

廣村：一瀬さんの夢って何ですか？

一瀬：たくさんあるんですけど、まずは今の園をより良くすることが一番かなって思います。で、自分のこれまでの経験を次の世代に伝えたいっていう思いもあるので、学生さんに対して保育のすてきなことをたくさん伝えられる講師もやってみたいですし、自分自身ももっと学びたいと思っているので、大学院にいて、もっと学んだり研究もしてみたいなというふうに思っています。それから、私、旅行が大好きなんですけど、世界一周をして各国の保育を見たり、いろんな文化とか価値観を知る中で自分の保育観を高められたらいいなと思っています。



このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

